

「忘れられた巨人」感想文

坪井 隆

1. イギリス在住のカズオ・イシグロが2017年度ノーベル文学賞を受賞した。彼は5歳の時、父の仕事の関係で長崎からイギリスに渡り、そのままイギリス国籍を取得した。(基本的には二重国籍は認められない。)彼がイギリスで教育を受けるためには、イギリス国籍が必要な訳である。彼の両親は、彼にイギリスの制度にのっとった教育を受けさせた。現在では、日本人としてのアイデンティティを持つため、イギリスの公教育の他、プライベート学校に行かせる親が多いそうである。いずれにしてもカズオ・イシグロの日本語能力は、5歳の状態で止まったか、むしろ退化しているかもしれない。現在63歳の彼は、人生の大半を英語を基本として物事を考え、作家活動が続けてきたわけである。

私は、現在69歳で、後2ヶ月すれば、70歳の大台に乗る老人である。文学が好きでたまらない、と言うほどではなく、まあ適当に読む普通の老人である。何年か前、カズオ・イシグロの「私を離さないで」を読んだとき、その題材の取り扱いに驚いた。クローン人間の愛を書き込んだ小説だったからである。読んだ後、複雑な気持ちになった。現在の生物学の知識・技術では、細胞一つ作ることは出来ない。それなのにクローン人間が出来るのかよ、と言う素朴な疑問。仮にできるとして、愛を感じる領域に入ることは、現実問題として非常に危険で、まさしく神の領域に入るからである。クローン人間とは言え、人間である限り、愛とか夢が必要である、それが書きたいだけで、クローン人間を肯定しているわけではない、と考えた。後にも先にもカズオ・イシグロの小説はこれのみである。彼がノーベル文学賞を得ることが決まってから、本屋の目立つところに、この「忘れられた巨人」が平積みで置かれ目にするが多くなった。そこで老人もひと踏ん張りして、この本を購入して読むことになった。

2. 最初の書き出しがすこぶる面白い。「イングランドと聞けば、後世の人はのどかな草地とその中をのんびりとうねっていく小道を連想するだろう。」全くその通りである。7年前イギリス旅行に行った。ロンドンの空港からバスに乗り換え、北に向かい150キロぐらい内陸部にあるチェスターに行った。チェスターには古代ローマ軍が駐留していたそうである。高速道路から見た景色は牧草地の連続である。牧草地には羊か馬が放牧されていた。イギリスのイメージは工業国であった。なぜなら資本主義の最先端を走った国だからである。と

ころが最初に見たイギリスの光景はとんでもない酪農国であった。

さて小説に戻るが、時代設定は5世紀末か6世紀の初めである。アーサー王の話及びアーサー王の甥を名乗る人物(ガウェイン卿)が出てくるからである。まさしく混とんとした時代である、5世紀始め、ローマによるブリテン島支配は終わった。その後アングロ・サクソンがドイツから海を渡り、ブリテン島に入り込んだ。いわゆる民族大移動である。小説では、ブリトン人かサクソン人かは重要な意味を持つ。

3. 小説の主人公は、ブリトン人の老夫婦、アクセスとベアトリスである。二人は人口60人ぐらいの村で平凡に暮らす。住居の位置は、丘の斜面に横穴を掘った兎の巣穴に近い構造で、光の差し込まない場所である。そういう意味では、村の中心人物とは言えないかもしれない。農作業には村全体が関わることもあり、二人は当然すべき義務を果たしていた。しかし、村から2,3日歩けばいるはずの息子に会いたくなり(記憶が曖昧で、過去が意味を持たない状況が書かれ、不可解さを感じると同時に謎解きが始まる。)、旅に出る決心をする。①第一日目、旅の途中での雨宿りのエピソード②第一日目、隣村に着いてから鬼退治の話。ここで村長のアイバー、鬼退治をした勇敢な騎士、サクソン人ウィスタンが登場。その時少年エドウィンを助ける。③第二日目、村を去る。④プレヌス卿、ガウェイン卿、共にアーサー王の家来、ガウェイン卿はアーサー王の甥でもある。雌竜クエリグが徘徊する話が出る。⑤修道院での出来事⑥第三日目、修道院を出る。山小屋で野宿⑦第四日目、雌竜クエリグ退治、アクセスとベアトリスは島に向かう。

この7つの分類は、わたしが便宜上ただけで、それ以上の意味を持たない。

4. 第一日目の旅の途中での雨宿りのエピソードが面白い。アクセスとベアトリスは途中、豪雨に会い、廃墟に近い建物で雨宿りをする。そこにはすでに先客が二人いた。一人は船頭、一人は老婆である。船頭は忙しい日々を過ごす。たまの休みの時、この廃墟に来て、(子どもの時、ここで育ったから)子ども時代の思い出に浸るそうである。老婆は、この船頭に騙されたと言いに来るようである。この船頭の島渡しの話は、⑦にも出てくる。あの世への渡し船の話とも読める。老婆は、この船頭に何を騙された、と言うのか。二人一緒(旦那と共に)に渡してくれることを期待したが、そうではなく、夫だけを先に渡してしまった。船頭曰く、「まれに、二人一緒に島に渡れることもあるのです。めったにないことで、認められるためには、二人がきわめて強い愛情で結ばれている必要があります。(中略)このお婆さんは認めたがりませんが、この方と

ご主人の絆は弱すぎたのです。」(P54 早川書房「忘れられた巨人」単行本、以下同じ。) 船頭の話は続く。「わたしたち船頭は長年にわたってたくさんの人を見てきています。(中略) 愛によって結ばれているという二人の中に、わたしたち船頭は愛ではなく恨みや怒り、ときには憎しみすら見る場合があります。あるいは、大いなる不毛とかね。ときには孤独への恐怖だけがあって、それ以外は何もなかったりします。年月を超える不変の愛など、めったに見られるものではありません」(P58) 愛に関する省察の一片をここに見ることが出来る。アクセスとベアトリスは頗る仲が良く、互いに思いやりのある夫婦である。さて船頭の考える愛の基準は、⑦ではどうなるのか楽しみでもある。

5. ②について述べる。アクセスとベアトリスは夜半、隣村に着いた。ベアトリスは以前ここに来たことがあるので、村の様子は知っていた。しかし、この日の村の様子は騒然としており、何か奇異な感じがした。聞き出した情報によると、兄弟と甥の三人が釣りに出掛けたが、二匹の『悪鬼』に兄が殺され、甥は人質となった、と命からがら逃げ帰った弟は言う。人質となった12歳の少年を助けたいと村中の人たちが願っているところに、東の沼沢地から来た一人の騎士(ウェスタン)が偶然村に立ち寄り、この事実を知り、二匹の『悪鬼』を退治し、少年(エドウィン)を助ける。ここまでは、めでたし、めでたしであるが、エドウィンの胸にかみ傷があるのを誰かが見つけた。この村の言い伝えでは、鬼にかまれた者は、鬼になると言われている。村長アイバーはよくできた人でこの迷信を信じない。折角助けた少年(エドウィン)を殺すのは忍びない。そこで、アイバーは、アクセスとベアトリスの二人に、明日出発するときに、エドウィンと一緒に連れて行ってくれるよう、頼む。助けたウェスタンもエドウィンに興味を持ち、四人で一緒に旅立つことにする。

話は前後するが、夜半アクセスとベアトリスは村人に取り囲まれ、袋叩き寸前のところをアイバーに助けられた。アイバーは村人一人一人に鬼退治の役割を持たせ、村は鬼退治の厳戒態勢をとっている矢先に、アクセスとベアトリスの二人が現れると、すっかり自分の役割を忘れ、二人を攻撃することに没頭する。アイバーはこの物忘れを村の病であると言う。これに対して、アクセスは言う。「わたしのところでも同じですよ、長老。わたしたちはこの奇妙な物忘れを『霧』と呼んでいます。わたしたち二人も霧の影響を免れませんが、それでも若い者たちよりはずいぶんましなようです。」(P78) 3で述べた記憶の問題がここでも語られ、霧の問題がかなり深刻であることが暗示される。

6.③、④について述べる。四人は村を去り、賢僧ジョナスのいる修道院に向かう。途中、アーサー王の甥と名乗るガウエイン卿に出会う。理詰めでかつ機知に富

む魅力的な老騎士である。山道ではブレヌス卿の家来たちが検問を行っていた。なんとか、煙に巻いて検問を通過するが、ウェスタンの正体がわかってしまう。彼は、この界隈に住むという雌竜クエリグを殺すように命じられた騎士であると言う。ブレヌス卿はクエリグを保護する役割を担っている。したがってブレヌス卿の兵士にとっては、ウェスタンは敵である。ガウェイン卿もアーサー王からクエリグを殺す使命を与えられているという。しかし、ガウェイン卿がその使命を与えられてから長い歳月が経っている。律儀で力もあるガウェイン卿がその任務を果たさないのは不思議と言えば、不思議である。

ウェスタンを敵とするブレヌス卿の兵士は、あっさりとウェスタンを殺されてしまう。

7. ⑤、⑥について述べる。ガウェイン卿を除く四人は修道院に着く。賢僧ジョナスは病気のため面会できないと言われるが、特別な計らいで、許可が下りる。

アクセル、ベアトリス、ウェスタンの三人はジョナスに会う。アクセルとベアトリスはキリスト教徒であるが、ウェスタンは異教徒である。キリスト教の建前と現実が違うのに、ウェスタンは腹を立て、ジョナスに文句を言う。

ジョナスは答える。「私たちの神は慈悲の神です。羊飼殿、異教徒であるあなたには理解しがたいかもしれませんが。その神に罪の許しを乞うのは一罪がいかに大きいとしても一愚かな行為ではありません。私たちの神の慈悲は無限です」

ウェスタンは反論する。「無限の慈悲を垂れる神など何の役に立つのです、神父。あなたはわたしを異教の徒とあざけるが、わが祖先の神は法を明確にし、その法に背いた者を厳しく罰する神でした。あなた方キリスト教徒の言う慈悲の神のもとでは、人は強欲に衝き動かされるまま、土地を欲しがり、血を欲しがらる。わずかな祈りと苦行で許しと祝福が得られるとわかっていれば、そうならざるをえません」ジョナスは、ウェスタンの反論の一部を認めざるを得ない。

さて、非常に唐突であるが、マタイによる福音書の19章の金持ちの青年の話について考える。16節「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか」イエスは答える。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」青年はこの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

教会の説教では、現実を変えることなく、神を信じることは、至難の業であると説かれることが多い。イエスの言葉は原理主義に徹する。ほかの場面でも、半分は、大半はという妥協的な言葉は使わない。わたしたちは、今年のクリス

マス献金はいくらにするか、等くだらないことで迷う。永遠の命はほど遠いことを実感する次第である。

話を元に戻す。ジョナスとウェスタンの会話を聞いていたベアトリスは、二人に質問する。「ジョナス様、ウェスタン様、お尋ねします。お二人はこの霧がわたしたちを襲うようになった原因をご存じなのですか」(P199)

「竜のクエリグです。奥様。このあたりの峰をうろつくクエリグが、奥様の言う霧の原因です。ですが、竜はここの修道院に守られています。」神父は、「羊飼い殿の言うことは真実です、ご婦人」「クエリグの息がこの地を満たし、私たちの記憶を奪います」(P199)

話は大分核心に近づいてきた。これまで全編を支配し、謎であった霧すなわち記憶の消去、忘却の原因が披露された。どうしてこんなことが起きるのか。クエリグは、なぜ人々の記憶を奪うのか、興味はそこに向かう。

8. ⑥を続ける。夜半、修道院は、クエリグの暗殺を目論むウェスタンとエドウィンに差し出せと迫るブレヌスの兵士に取り囲まれる。ウェスタンは塔によじ登り、そこに閉じ籠り、兵隊と睨み合いを続ける。この間に、三人はジョナス神父の命を受けたブライン神父の導きで、修道院の地下通路に逃げる。(P210) 途中ガウェイン卿が三人を守るため、待っていた。地下通路は古い時代の巨大な埋葬地に繋がった。四人は、必死に地上への通路を探すが、人間を食べることが当たり前のような奇怪な犬の化け物(この描写は迫力がある)に出くわす。四人は協力し合い、この化け物に立ち向かう。エドウィンが蠟燭の明かりを、化け物に近づけ、ガウェイン卿がすかさず、首を切り落とした。その間にアクセスとベアトリスは地上に繋がる門を探した。極度の緊張のせいか、アクセスは自分の経歴にまつわる過去の一端を思い出す。「ガウェイン殿、遠い昔、わたしたちが同志だったということはありませんか」「わたしの過去は濃い霧に覆われています。ですが、最近ある任務を思い出すことがあるのです。わたしに託された重大な任務—あれは法だったのか。あらゆる人間を神に近づける偉大な法だったのか、……。卿の存在と、卿の語るアーサー王の話が、長く隠れていた記憶を騒がせませす、ガウェイン卿」(P233)

話がさらに前進するのを感じる。

9. 8でウェスタンは塔によじ登り、そこに閉じ籠ったことを書いた。ウェスタンは騎士として有能で、軍事に関するあらゆる知識に精通しており、修道院が以前は軍の要塞として建てられた建物であることを知っていたので、塔のある建物に火がつけられたが、塔の上から飛び降り、ジョナス神父の仲間に助けられ一命をとりとめた。地下通路より逃げ切ったエドウィンが会いに来た。そ

の時、エドウィンはウェスタンとブレヌス卿の関係を聞き出す。ウェスタンはサクソン人として生まれたが、ブリトン人に育てられ、ブレヌス卿の軍隊に入り、頭角を現すようになった。ところがなんとブレヌス卿の指示で、軍隊で虐めに合うようになり、軍隊を離れざるを得ない境遇となる。その後他のサクソン人の王に使え、今回クエリグ殺害の使命を帯びたと考えられる。

傷が癒えたウェスタンはエドウィンと共にクエリグの住む所に向かった。途中、ウェスタンは、これまで明かさなかった胸中をエドウィンに伝える。

「もしわたしが倒れて、君が生き残ったら、これを約束してくれ。君の心にブリトン人への憎しみを持ちつづけてほしい」

「尊敬したくなるブリトン人も、愛したくなるブリトン人もいる。それは痛いほどよくわかっている。だが、そういう個人的な感情よりずっと大きなことが、いま差し迫っている。わが同胞を殺戮したのはアーサー王配下のブリトン人だ。君の母やわたしの母を連れ去ったのもブリトン人だ。ブリトン人の血が流れるすべての男と女と子供を、わたしたちは憎まねばならない。それは義務だ。だから約束してくれ。もし、技の伝授を終えるまえにわたしが倒れても、君は心の中でこの憎しみを育てつづける。(中略) そう約束してくれるかな、エドウィン」(P313)

10. 話は収束に向かう。アクセス、ベアトリス、ウェスタン、エドウィンそしてガウエイン卿がクエリグの住む場所で一堂に会する。アクセスは8で述べた様に、かつて自分はガウエイン卿と同志であり、ガウエイン卿の役割を知っていた。「ここは出番ではありませんか。もう振りはやめましょう。騎士殿は雌竜の護衛役ではないのですか」

「そのとおりだ」ガウエインは開き直ったように、エドウィンを含む全員を一人一人ながめた。「雌竜の守り手であり、最近では唯一の友である。」(P361)

何となく、言動がまとも過ぎておかしいガウエイン卿が二重スパイであることが明らかになる。すなわち、ウェスタン、エドウィンとガウエイン卿は敵対するわけである。ガウエイン卿は言う。クエリグの息にマーリンの大魔法(忘れると言うこと)を乗せた。それは戦争の悲惨さを忘れるためであり、戦争を繰り返させないためである。それによって平和が維持されている。(P369)

ウェスタンは虐殺と魔術の上に築かれた平和は長続きしない、と即座にガウエインの言葉を否定する。結局二人は戦うことになる。アクセスとベアトリスはウェスタンを応援すると言う。(P372) 結果、ガウエイン卿は死ぬ。

その後ウェスタンは雌竜クエリグも退治する。ベアトリスはウェスタンに今後のことを聞く。「正義と復讐です、奥さん。これまで遅れていた正義と復讐が、いまや大急ぎでこちらにやってきます。」(P382)

そして、かつて地中に葬られ、忘れられた巨人が動き出す。サクソンの国々が次々に樹立されるであろう、と述べる。

11. 前述のガウェイン卿の言葉は、現在に還元すると、国家による情報操作の問題に繋がる。現在国家による国民、集団に対する、様々な監視活動がなされている、と聞く。監視活動はテロ防止のため、国際平和のためと言われることが多い。ガウェインの場合の情報操作は、戦争の悲惨さを忘れるためであった。しかし、そのために、アクセスやベアトリスを始めとし、多くの人の記憶に傷をつけ、または記憶を消し、正常な社会生活を営むことの邪魔をした。国家の情報管理の在り方が問われる由縁である。個別的なケースで目的と手段の関係を考えるべきである。わたしは、カズオ・イシグロは国家の情報管理の在り方を問題提起しているだけで、その当否の結論を述べているとは、考えていない。

ウェスタンの言った、サクソンの国々が次々に樹立されることは、歴史的事実としてはその通りとなった。しかし、ウェスタンの言う「正義と復讐」は正しいか。

唐突であるが、キリスト教の観点から、考察する。

マタイによる福音書 5 章 38 節—39 節「あなたがたにも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言う。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」イエスの時代、同害報復は一般的に正義と考えられていた。これに対してイエスは復讐を全面的に禁止する。また、ローマの信徒への手紙 12 章 19 節 愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」とある。やはりここでも復讐禁止が述べられている。同害報復をきちんと判断するのは難しい。同害を超えたら新たな悪とみなされ、それに対して次なる同害報復が認められ、結局は悪の連鎖を生むことになる。イエスは同害報復を放棄することによって悪を克服する態度を述べる。古代ギリシャやローマの物語には復讐は当たり前であった。しかし、イエスは新しい思想を盛り込む。「ゆるし」が先である。ゆるしのない報復・正義を認めない。その意味でウェスタンの言う「正義と復讐」は間違っている、と考える。

12. とうとう第 17 章の終章に来た。小説の表現形式がここでは変わる。船頭が一人称の「おれ」で書かれ、また時間軸は、息子に会うために村を出た時の延長にあり、まだ数日しか経っていないはずであるが、アクセルとベアトリスは、お爺さん、お婆さんと表現され、急に年寄りとなっている。これらが、何を

象徴するのか、わたしにはわからないが、様々な事件は終わり、単純に二人（船頭を含めれば、三人）の世界の話となる。

新約聖書コリント人への第一の手紙 13 章 4-7 節「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

愛と言う言葉は、ギリシャ語でエロースとアガペーの二つがある。エロースは性愛で、聖書に出てくる愛は、アガペーがほとんどである。これは相手に対する気付き、思いやり、奉仕を中心とする。生まれたばかりの赤ん坊と母親の関係を見れば、理解が早い。赤ん坊はお腹が減った時、おしめが濡れた時、ただ泣くだけである。母親はその泣き声で、赤ん坊の世話をする。ここにわたしたちは、アガペーの在り方を見ることが出来る。アガペーは親子関係だけではなく、友人、恋人、夫婦の間でも存在する。

わたしたちは現在資本主義の只中で生きている。貨幣経済は極度に発達し、おおよそ、お金で買えないものはない（もちろん愛は原則としてお金で買えない）、と錯覚するほどである。物を買ひ、それを相手にプレゼントするのは愛の一表現とされる。恋人と一緒に、夫婦でレストランの高い食事をするのもしかりである。極端に言うと、女性である私の能力（若さと美貌）は、男性の地位、財産、ステイタスと等価交換される時代である（EH, フロム「愛すること」参照）。

しかしながら、貨幣経済前、そして現在でも愛の基本は、相手に対する気付き、思いやり、そして奉仕することが中心である。アクセルとベアトリスは互いに相手をよく見ている。絶えず声掛けして、相手の状態を確認する。対話にもとげがない。ストレートに相手に向き合う。お互いが掛け替えない人生の同伴者である。愛することは、言葉やものではなく、まなざしであり、思いやりである。

13. 二人は長い間共同生活をしてきた。その間に、望まない過去を持ってしまふこともある。会いに来たはずの息子もずつと以前、二人の軋轢にいや気が差し、家を飛び出し、疫病にかかり死んでいた。息子の墓はこの近くの島にある。ベアトリスは二人の軋轢の原因は自分にある（不貞）と悩み、息子の墓参りに行くことを願っていたが、アクセルはそれを禁止した。おそらく彼にとっては、触れられたくない過去だったようである。しかし、それも今では克服できた過去となった。（P404,405）霧に苦しんでいたころは、すべてが忘却のかたにあり、過去を整理する必要はなかったが、これからはそうではない。私たちは、すべからく過去を整理しながら、現在、未来に進まなければならない。

島に行くのは、息子のところに行くだけかと思っていたが、そうでもないようである。二人は島に渡り、そのまま二人で生活したいと願っている。二人の愛情が極めて強い場合は、まれに二人一緒に島に渡れることがある、とする船頭の話をもとに4で述べた。ベアトリスは、自分たちは島で二人一緒に暮らせるか、と船頭に聞く。船頭はそれを肯定する。「奥さん。正直に申し上げます。あなたとご主人は、わしら船頭がめったに目にすることのないご夫婦です。雨の中を馬で来られたとき、常に強い愛情で結ばれていたご夫婦であるとわかりました。お二人が島で一緒に暮らすことを許されるのは疑いのないところでしょう。その点では心配はご無用です」(P398)

さて、二人は船に乗るが、船は小さいため、一人ずつしか無理であると船頭は言う、ここでアクセルと船頭は喧嘩になってしまう。アクセルは二人一緒に主張し、船頭は一人であると言う。アクセルはベアトリスに船頭に従うよう説得され、納得するが、なんとなくうつろな行動で全編を閉じる。

島は、パラダイスなのか、黄泉の国なのか、それとも単純に島なのか考えてしまう。また、アクセルは船頭と喧嘩する前に、今の状況を神に委ね、祈ればと。

アクセルとベアトリスが島に渡り、息子の思い出と共に平穏な日々を過ごせることを願い、筆を置きます。

2017年12月16日記